

『三木成夫的生命科学』の新展開◆糸川麻里生

西原克成著

『内臓が生みだす心』

日本放送協会出版—九六六円(税込)

本会の会員でもある著者は、三木成夫の東京医科歯科大学の教え子であり、三木からゲート、ヘッケルに連なる「生命の形態学」の思想を学んだ後、歯科医としての勤務を経て、東大大学院へと進み分子生物学の分野で博士号を取得した医学者である。本書は、現代の「質量を持った物質」中心の自然観が、脳を心の座とする誤った近代的身体観を生み出したとし、いわゆる内臓、とりわけ腸こそが感情、魂のありかであることを主張する。議論の過程では、ゲートの自然観あるいは生命観が繰り返し参照され、著者はそこから「二十世紀の身体観」を見出そうと試みる。

著者はまず、クレア・シルビアの驚くべき手術例を紹介する(「記憶する心臓」クレア・シルビアとウィリアム・ノヴァック著、飛田野裕子訳、角川書店)。一九八八年、アメリカ人女性クレアが難病に冒され、心臓と肺の移植を受ける。ところがやがて、クレアは臓器のドナーとなった青年(バイク事故で死亡)の心が、自分の意識の中に入り込んでいくことに気づきはじめる。やがて、クレアは夢の中でティム・レイトンという名の若者と出会い、打ち解けた友人関係になるが、このティム・レイトンこそが自分に臓器を提供したドナーであったことを、クレアはのちに偶然目にした新聞記事で知り、驚愕する。

クレアは、やがて様々な臓器移植を受けた元患者のサークルに出入りするようになるが、このサークルのメンバーの多くが、多少なりとも、自分の中にドナーの心を取り込んでいるように「という発想こそが、現代医学の死角を照らし出す光となる。著者は、脊椎動物の進化を原素動物のホヤの祖先、ムカシホヤにさかのぼり、そこからエネルギーの交替する場としての「腸」とそこに並行して起こる現象としての「心」を探求してゆく。

ホヤのからだは養分吸収の腸管と呼吸のための鰓腸からなり、口から食物と酸素を含んだ海水を取り込み、鰓穴と肛門から排出する、袋のような作りになっている。ところが、ホヤの子どもにはオタマジャクシのような尻尾があり、魚型で泳いでいる。この、泳いでいる多節体ホヤに重量の作用が及ぶと、やがて「頭」と「尻」ができ、脊椎動物の内臓構造も生じてくるという。

やがて、魚類はネコサメの段階に達する。このネコサメが陸地上がると、のたうちまわって血圧が上昇し鰓で空気呼吸ができるようになる。また、血圧が高まると、流動電位が高まって、間葉細胞の遺伝子が起動して軟骨が硬骨化し、やがて骨髄に造血の組織が生まれて哺乳類が誕生するというのが、著者の

でいる、と感じていたという。それは記憶や、気性であったり、食べ物の嗜好であったりしたが、明らかに移植手術前にはなかった「心」が、元患者たちの内面に移されていたのだ。

だが、この驚くべき現象は、現代医学からはほぼ完全に無視されているという。生命の本質たる「魂」や「心」が内臓腸管系に存在することを証明しているため、これを研究していくと、臓器移植に対して新たな問題が噴出してしまふからだ。心臓が生きていても、脳の機能が止まっていけば、すなわち脳死状態であればその人は死んでいるとみなす臓器移植の前提が崩れてしまふからだ。

著者は、この現象を考察するために、生命の本質を遺伝現象にあるとしたシュレーディンガーの生命観をしりぞけ、生命体を「エネルギーの渦がめぐるとともに個体のパーツが発生・成長・リモデリングする仕組みのこと」が生じる、というのである。

そのような進化観と、「エネルギー」の生命観にもとづいて、著者はヒトの各臓器の由来をホヤの段階までさかのぼる。すると脳は、「腸の内胚葉の神経と皮膚の外胚葉上皮の神経の合体した神経管の束」であり、エネルギーの交替を行う諸臓器をむしる補佐する器官と見なされる。そして、エネルギー交替の主要たる腸管および鰓管に由来する、呼吸、摂食、消化吸収、排泄、および生殖に直接関係する臓器こそが「心」の場だと主張する。そこから展開される、「臓器としての頭」の形態論は、本書の白眉といえるだろう。

本書に述べられているのはひとつの思想だが、その思想に基づく治療法で、著者は多くの難病患者を救ってきた。ゲートの自然観が現代社会にとって持つ意味を考える上でも、いくつもの重要な主題を提供している。

(くめかわ まりお・独文学)

で、これによりエイジング(老化)を克服する仕組み」と定義しなおす。これにより、遺伝も「個体丸ごとのつくり替え」と見なされる。そう考えることで、呼吸、代謝、生殖等、生命体が行う様々な営みが、ひとつの視点から総合的に理解されようというのである。現代の生命科学はまだ十九世紀的な「質量保存の法則」を土台にして構築されているとする著者は、二十世紀的な「エネルギー保存の法則」を完全に咀嚼して生命科学の体系に取り込むことで、質量のある物質と質量のないエネルギーを同じ次元で論じることが可能になる、と主張する。すなわち、心や精神、霊も、体温や呼吸、発汗や音声、超音波、生物発光とならんで、生命活動の本質である新陳代謝と平行して起こる、体内の電気現象として見なすことができるというのである。

このような生命観による探求の手引きを、著者はゲートから得る。生涯にわたる形態学の研究を通してゲートが獲得した、「生命体には目標も目的もない」という確信と、「器官の本質を知ろうと思ったら、その由来をた